

PSIV-3 橋梁景觀設計における 主題設定に関する思考モデル

埼玉大学 正会員 窪田陽一

1. 橋梁景觀設計思想の諸段階

近代橋梁技術が導入されて以来百年以上が経過し、その間様々な橋梁が設計され建設されてきた。各時代の経済情勢や価値観に影響されつつ、次々と新たな景觀が創出されてきたわけである。そして今日、設計し建設することができる橋梁の種類は極めて広範囲に及び、構造形式として考えられるものはほぼ出尽くしたとも言われている。橋梁史的な論考は別稿に譲るとしても、橋梁架設の経験の蓄積と共に橋梁に対する考え方が大きく変化してきていることは事実である。特に近年の景觀整備の流れの中で、橋梁景觀は重要な要素として取り上げられるようになってきている。第二次大戦後の我が国における橋梁群を景觀の側面から捉えてみると、設計思想として以下の諸段階が見られる。

- ①機能主義的(functionalistic)傾向：交通上の機能性と経済性に重点を置く。
- ②形態主義的(formative)傾向：単体としての構造形態の造形性及び美観の追及を行う。
- ③環境主義的(environmentalistic)傾向：周辺環境との関わり合いの中で橋詰広場や付属物のデザイン等により空間的環境の形成を図る。
- ④文脈主義的(contextual)傾向：地域的な観点からの意味付けに基づいて構造形式や付属物のデザインを行う。

かつて近代橋梁技術を導入し消化し始めた明治末期から昭和初期の頃に見られた装飾主義的(ornamental)傾向は②③④のいずれにおいても現れるものであるが、戦後における大きな違いは、主題設定の側面に現れている。これには、技術的可能性の向上と共に、橋梁景觀に関する文化論的な考察が深められたことが関係していると言える。

2. 橋梁設計過程と景觀の主題設定

上述した諸段階は時代の経過と共に出現した設計思想を傾向として分類したものであるが、これらは設計代替案の選択肢の類型としても捉えることができる。しかし橋梁設計過程の中での位置付けを考えると、①から④への順序はむしろ逆の方向にならざるをえない。それは①より④に近くなる程基本計画の段階での検討が重要になり、扱う範囲がより広く、また抽象性が高いからである。このような思考形態をとるようになると、そこには一貫した論理性を持たせることが必要になってくる。また、設計行為の最終目的が形態の決定にあることから、そこには視覚的なイメージを伴っていないてはならない。景觀的な主題設定の必要性はそこにある。そしてそれは地域的な景觀構造の中で検討されるべき事柄である。

3. 橋梁景觀の主題

主題とはテーマ、即ち中心となる思想内容のことであり、景觀はその設計思想の表現形式となる。従っていかなる設計の考え方をとつても、必ず主題は存在する。しかしここで重要なことは、自覚的に主題を設定し、橋梁工学的技術思想以外の事柄を含み込むことである。文脈主義的なアプローチではこの部分が大きなウェイトを占める。しかしそのときの主題はまた橋梁空間の環境構成や橋梁本体の形態構成にも反映されていることが望ましい。機能構成の充足は当然のことである。

橋梁景觀の主題設定は、思考の手段が言語中心に偏すると、具体的な形態との対応に無理が生じやすく、結果的に陳腐化する危険性が高い。従って形態構成との間のフィード・バックを行うことが必要である。これは景觀という現象が視覚を媒介とした総体的な体験であるのに対し、言語による抽象的思考は実体概念から遊離しやすいからである。いわば「景觀思考」と称すべきプロセスが求められる。このような思考形態は従来の設計作業の流れとはかなり性格が異なるものとなるはずである。

4. 主題設定の思考モデル

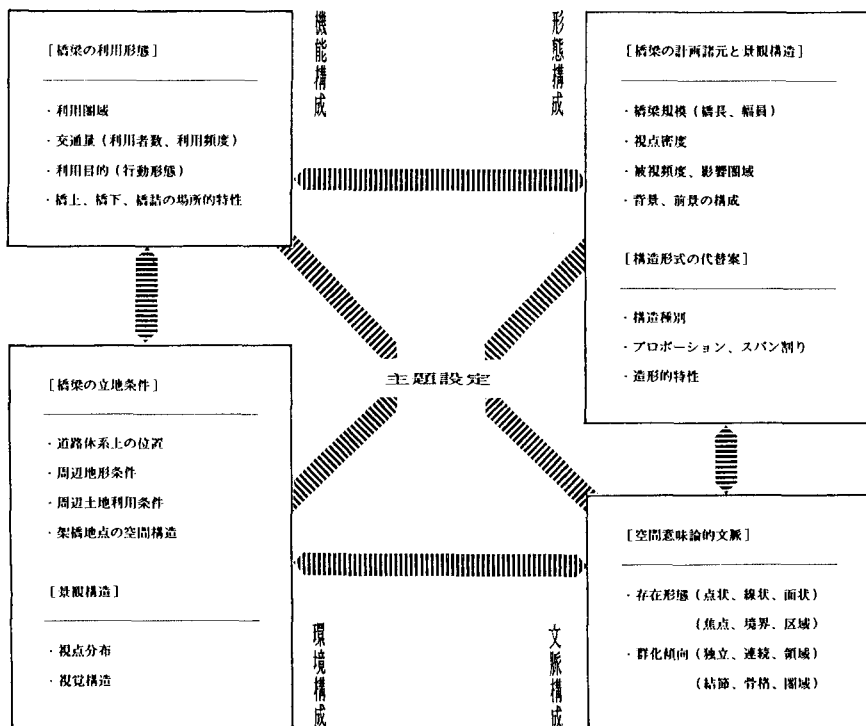
景観的な主題設定である以上、地域的な文脈の解説だけでは十分ではなく、技術的検討に基づいた形態の可能性、橋梁がどのように眺められまた使われるかに関する環境的・機能的な構成が、視覚構造の中で相互に関連付けられることが必要である。

橋梁の機能構成は、狭義には交通上の機能に関するものであるが、主題設定上は利用者の内容・密度・目的等が重要になる。このような利用形態に関する検討は、デザイン密度の設定や空間構成の決定につながるものである。

環境構成に関する検討は、機能構成との接点を持ちつつも、周辺の地形や土地利用等の立地条件、並びにそれらによって規定される景観構造に関する分析を含むものとなろう。これにより、景観的な主題性をどのような眺めかたの中で設定するかが明らかにされる。

形態構成には、橋梁の計画諸元に対する技術的検討に基づく可能な構造形式の代替案の設定から、それらの景観的な意味付けを環境構成並びに地域的な文脈構成の中で比較検討することまでが関わっている。

最も広範な思考を要する文脈構成については、その当該橋梁の存在が影響を受けると考えられる地域における景観構造が起点となる。特に空間的な立地形態に関する意味論的アプローチは、主題そのものと成りうるものであり、形態構成を規定することも有りうる。例えば、ゲート、シンボル、ランドマーク等の記号論的な特性が読み取れる場合には、構造形式の選定条件に関わり、また基本的な設計指針ともなる。



5. 結語

本稿においては紙面の都合上極めて要約的に思考モデルの枠組みを示したに過ぎない。その内部において展開される過程は、実際には相互作用的に進行するものであり、プランニング・ワークとデザイン・スタディが重層的に行われるものと言うことができよう。